

英文校閲の実際 第 11 話

——抽象名詞の扱い方について

日本人が書いた英文に、概して数の誤りが多い理由は、日本語に一般的な複数形がないので、日本人は英語を扱うときでさえ、しばしば名詞の数を意識していないためです¹⁾。一方英語には、主語の数を確認するための仕組みが三重に存在します。①数を示す不定冠詞や数詞を主語の前に置き、②単数か複数かで主語の語尾を変え、③主語の数に合わせて述語を変える必要があります¹⁾。そのような訓練を生まれたときから積んでいる英語話者にとっては、数と無関係な英語は最初から存在せず、彼らが正確に数进行处理できるのは当然です。数の処理に不慣れな日本人は抽象名詞の扱いも苦手です（理由は後述）。文例 24 は、SD が抽象名詞の扱いに失敗した実例です。

文例 24 : Preliminary Two-Week Oral Toxicity Study of ABC-123 in Rats, (3/5)

Results より

(校閲前原文) : ⑨ At necropsy, bilateral punctate white discoloration in adrenal glands was noted in one male in the 10 mg/kg group, ⑩ which was represented histopathologically as slight multifocal cytoplasmic vacuolizations in zona fasciculata and zona glomerulosa. ⑪ However, those were considered spontaneous lesions ⑫ because these changes were observed in only one male and were not observed in adrenals in the other treated groups.

(和文) : ⑨剖検では、10 mg/kg 群の雄 1 例の両方の副腎に、両側性の白色の斑点状の変色が認められ、⑩病理組織学的には、これは柵状帯及び球状帯の多発性の軽度な細胞質の空胞化(複数)に対応していた。⑪しかしながら、あれらは自然発生的病変であると考えられた。⑫なぜなら、これらの変化は雄 1 例のみに認められ、他の投薬群には認められなかったからである。

(校閲後) : ⑨ At necropsy, punctate white discoloration foci in the adrenal glands were noted bilaterally in one male in the 10 mg/kg group, ⑩ which were represented histopathologically as multifocal aggregates of cells with slight cytoplasmic vacuolization in the zona fasciculata and zona glomerulosa. ⑪ However, these changes were considered spontaneous lesions ⑫ because they were observed in one male only and were not observed in the adrenals in the other treated groups.

(解説) 文例 24 には単純ミスから重大なものまでレベルが異なる多くの誤りが含まれています。そこで今回は、これまでの例文の解説とは異なり、文例 24 に含まれる主な問題点をあらかじめ抽出し、箇条書きにしてから、校閲者による修正を、重大なものから順に解説します :

- (1) 原文⑨の剖検所見“discoloration”(変色)は数の概念とは無縁の抽象名詞であるが、これを修飾する形容詞“bilateral”(両側性の)と“punctate(斑点状の)”は複数の概念である。
- (2) ⑨の“discoloration”の後に置かれた“in adrenal glands”も複数であり、(1)と合わせると、SD が主語を複数と見做していることは明白であるが、述語“was”と数が合わない。
- (3) ⑩の病理組織学的所見“vacuolizations”(空胞化)も抽象名詞なので、複数形は誤りである。

(4) ⑪の“those”及び⑫の“these changes”は、前後関係から共に原文⑩の病理組織学的所見“vacuolization”を指すと思われるが、代名詞が異なるため、意味不明である。

ここから校閲者による修正の解説に入ります。校閲者は、原文⑨と⑩に上記(1)-(3)にまとめたような問題点があること、そして、これらの問題点の全てが、剖検所見と病理組織学的所見が共に抽象名詞であることから発生していると判断しました。そして、原文⑨と⑩に、以下の2つの抜本的修正を加えました。第1の修正は、原文⑨の主語“punctate white discoloration”（斑点状の白い変色）を、抽象名詞から普通名詞の複数形“discoloration foci”に修正したことです。“foci”は“focus”（焦点）の複数形ですが、ここでは「(複数の)変色病巣」を意味します。

第2の抜本的修正は、原文⑩の病理組織学的所見“cytoplasmic vacuolizations”（細胞質の空胞化、ただし複数形は誤り）を、抽象名詞から普通名詞“aggregates of cells”（複数の細胞集団）に修正したことです。これら2つの修正は、いずれも抽象名詞を普通名詞に置き換えたものですが、よく吟味された見事な修正です。これらの修正により、原文⑨と⑩に含まれていた主語と述語の数の不一致が一挙に解消され、剖検所見と病理組織学的所見が自然につながりました。

原文⑪と⑫には、箇条書きの(4)で指摘したような代名詞の誤用問題が存在しましたが、校閲者はこれらに対しても、適切な修正を加えました。すなわち、原文⑪の“those”（あれら）は、病理組織学的所見の代名詞として距離感が不適切であり、しかも代名詞だけでは何を指しているかが曖昧なので、“these changes”（これらの変化）に修正しました。また、そのままでは⑫の“these changes”と重複するので、後者を“they”に修正しました。これらの修正により、⑨～⑫の4つの文章がスムーズにつながり、意味が分かり易くなりました。

後は細かい修正ですが、⑩の原文では主語の前に3つの形容詞が並んでいましたが、校閲者は“bilateral”を副詞に変えて⑩の最後に置き、読みやすくしました。また、⑩の“adrenal glands”と“zona fasciculata”の前に“the”が追加された理由は、これらが組織学用語だからです。

文例24に関する以上の解説により、英文報告書では、抽象名詞を安易に主語にすると、その後の数の処理が困難になるため、避けたほうが良いことがお分かりいただけたことと思います。

【補足説明】 ここで名詞の種類とその数の扱いに関して簡単に補足しておきます。

英語の名詞には、普通名詞、抽象名詞、集合名詞、物質名詞、固有名詞の5種類があります。紙面の都合で詳細な説明は省きますが、普通名詞は可算名詞であり、単数形と複数形があります。抽象名詞と物質名詞は不可算で、複数形はありません。集合名詞（例：“audience”、聴衆）はそのまま複数扱いされます。固有名詞は大文字で書き始め、不可算です。ただし、例外のない規則はないといわれるとおり、これらの文法には例外があります（後述）。

日本人が英文を書く場合に重要なことは、これらの名詞の正確な分類よりも、その名詞が可算か不可算かを知ることです。可算か不可算かが判れば、名詞の正確な分類を知らなくても、数の誤りが防げるからです。ある名詞が可算か不可算かを判断する最も簡単な方法は、その概念を絵に描けるかどうかであるとの主張があります²⁾。描ければ可算、描けなければ不可算です。

この判定法の有効性を文例24で検証してみましよう。⑨の“discoloration”（変色）や、⑩の“vacuolization”（空胞化）は、変化の過程及びその結果ですが、変化は絵に描けません。一方、修正後の“discoloration foci”（変色病巣）や“aggregates of cells”（細胞集団）は、診断の対象となった標本という実体を伴っており、スケッチすることも、写真に撮ること

も可能です。すなわち、上記判定法は有効です。

名詞の可算・不可算の判断が難しいもう1つの理由は、可算名詞と不可算名詞の両方に使い分けられる名詞があることです。抽象名詞は通常、不可算ですが、例外的に一般名詞（可算名詞）になることがあります。例えば“beauty”（美）は抽象名詞ですが、“She is a real beauty.”（彼女は真の美人だ）というときの“beauty”は普通名詞です²⁾。また、もっと高い頻度で可算名詞と不可算名詞に使い分けられる名詞もあります。例えば、“instruction”は、「指示」や「指示書」の意味のときは可算ですが、「教育」の意味では不可算です。また、“application”は、いわゆる「アプリ」は可算で「応用」は不可算です、同様の名詞に、“attitude”（態度と気分）、“arrangement”（手配と整理）、“experience”（経験と体験）、“promise”（約束と見込み）、“recommendation”（推薦状と勧告）などがあります³⁾。（補足説明終わり）

文例25 : Preliminary Two-Week Oral Toxicity Study of ABC-123 in Rats, (4/5)

Results, Histopathology より

(校閲前原文) : ⑬ In histopathology, slight hypertrophy of zona fasciculata cells in adrenals was observed in 4 females in the 30 mg/kg group and in 3 females in the 100 mg/kg group. ⑭ The cytoplasm of zona fasciculata cells indicating hypertrophy showed eosinophilic granular appearance accompanied with a decrease in cytoplasmic lipid droplets.

(和文) : ⑬病理組織学では、30 mg/kg 群の雌4例と100 mg/kg の雌3例に副腎の柵状体細胞の軽度肥大が観察された。⑭肥大を示す柵状体細胞の細胞質は、機能亢進を示唆するエオジン好性の顆粒状の外観を呈し、細胞質脂肪顆粒の減少を伴っていた。

(校閲後) : ⑬ On histopathology, slight hypertrophy of the zona fasciculata cells in the adrenals was observed in 4 females in the 30 mg/kg group and in 3 females in the 100 mg/kg group. ⑭ The cytoplasm of the zona fasciculata cells had an eosinophilic granular appearance accompanied by a decrease in cytoplasmic lipid droplets indicating hypertrophy.

(解説) ⑬ “In hitopathology,” が、“On histopathology” に修正されています。しかし、原文の“In hitopathology,” も誤りではないことは、Google USA で原文と修正後の表現をフレーズ検索すれば、ヒット数が殆ど同数であることで分かります。また、⑬の“zona fasciculata cells”や“adrenals”の前に“the”が追加された理由は、細胞、組織、器官名には通常“the”が必要だからです。

⑭の原文では、“indicating hypertrophy”が主語の直後に置かれていましたが、校閲者はこれを文の最後に移しました。理由は主語を短縮し、主語と述語を近づけるためです。また、“showed eosinophilic granular appearance”の“showed”が、“had”に修正されました。理由は、「～の外観を持つ」方が英語として自然だからです。更に、“accompanied with”が“accompanied by”に修正されましたが、“with”でも誤りではないことは、Google USA のフレーズ検索で分かります。ただし“accompanied by”のほうが使用頻度が高いことは確かです。

(馬屋原 宏)

引用文献

- 1) 馬屋原 宏：『日本人と英語』, 葉事日報社 (2016)
- 2) 「名詞の区別は2種類のみ。可算名詞と不可算名詞の見分け方」:
<https://www.nichibeieigo.jp/kotsukotsu/exam/1214/> Metropolitan Academy of English,
- 3) 「抽象名詞の可算・不可算と慣習的な表現」: <https://www.maetoronto.com/ieltsblog-grammar2/>